相談支援つうしん

＜第 53 号＞2019　5 月 14 日
県立湘南養護学校　支援連携部
相談支援係　～教師編～

大型連休はいかが過ごされたでしょうか。遅くなりましたが、今年度も校内のさまざまな実践や特別支援教育に関する知見についてご紹介していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

★☆試行錯誤学習と無誤学習☆★

試行錯誤学習（trial & error learning）とは、おそらく多くの方にとってなじみのある学習の仕方で、“失敗は成功のもと”ということわざにあたります。一方の無誤学習（errorless learning）とは、あまりなじみのない言葉かもしれませんが、成功を通して新しいことを学習するような学習の仕方です。すなわち、新しいことや苦手なことを学習するときに、最初は子どもが常に正解を出せる状態を設定し、そこから子どもが失敗しないように慎重に少しずつ支援を減らしながら、正解が維持されるようにしていきます。

「それでは失敗に対する耐性がつかなくなるのでは？」という指摘があるかもしれませんが、私たちは成功体験の積み重ねがあるからこそ失敗への耐性をつけることができます。やることなすこと最初から失敗ばかりだったら、いくら失敗は成功のもととはいえ、やってみようという気持ちが萎えてしまいます。特別支援学校に入学してくるお子さんの中には、自己肯定感が低かったり失敗に対して過敏に不安を覚えたりする生徒がいます。おそらく、これまでの学校生活で友達関係につまずいたり、勉強についていけずに不全感を抱いたりしたのでしょう。そのような経験の多い子どもの場合、「失敗したっていいんだよ。」と伝えても、なかなか受け入れてもらえなくなりがちです。

そこで、特別支援学校の専門的なアプローチの一つとして、この無誤学習の考え方が挙げられます。試行錯誤学習と無誤学習のどれか一つの方法だけに偏らず、上手に使い分けて児童生徒の力を伸ばしていきます。

- 失敗経験が多い
- 自己肯定感が低い
- 失敗を過度に恐れる
- 新奇なことを避けたがる

→ **無誤学習がより有効**

※無誤学習は動機づけを高める効果がありますので、どんな段階にいる子どもにとっても有効なアプローチです。

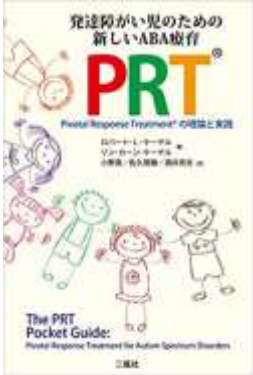
↕

- 自信がある
- 適切な自己肯定感
- 失敗をばねにできる
- チャレンジ精神がある

→ **試行錯誤学習 ＋ 無誤学習**

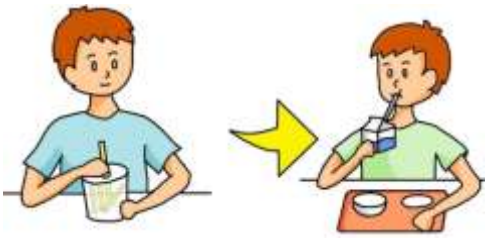
無誤学習の実例については、本校にも文献「応用行動分析で特別支援教育が変わる　子どもへの指導方略を見つける方程式」　山本淳一　池田聡子　著　図書文化 2005」がありますので、ぜひご一読ください。

★☆社会的有意性を考える☆★



自閉症児の療育技法の一つに、機軸行動発達支援法（PRT；Pivotal Response Treatment） というアプローチがあります。これは、「楽しい」とか「やりがいを感じる」といった子どもの好んで行うこと（動機づけ）を最大の機軸として発達支援を行うという特徴があります。そのため、いわゆる授業の枠組みに拠らず、日常生活のあらゆる場面を学習の機会として活用します。PRT を提唱したケーゲルは、その著書（発達障がい児のための新しい ABA 療育 PRT　Pivotal Response Treatment の理論と実践　ロバート・L・ケーゲル、リン・カーン・ケーゲル著　二弊社　2016）の中で、***子ども達の学習や行動に介入する際には、介入によって子ども達の生活はどのように変わるのか(社会的有意性)を絶えず考えなければならない、***と指摘しています。

校内の実例を挙げると、小学部の A さんはプットインを好んで行います。一方で、彼は給食の牛乳にストローを上手く差すことができません。そこで、担任はストローを自分で差せるようになるといいなあ（社会的有意性）と考え、プットイン課題をストローで行うようにしました。指導と練習を重ねることによって、A さんは自分で牛乳にストローを差して飲むことができるようになりました。なぜその課題を行うのか、その自立課題ができるようになることで子どもの生活がどのように変わるのか、そうした視点で課題を見直してみると、新たな発見や改良点が見つかるかもしれません。



～校内の風景～　**コミュニケーションブックならぬ、コミュニケーション前掛け！**

本校では、PECS（ペクス）などの視覚的なツールを使ってコミュニケーションをとっている児童生徒がいます。これらのツールを活用する際の課題の一つとして、携帯性があります。すなわち、いかに不自由なく持ち運びができるか、という課題です。身体の小さい小学部の児童によっては、コミュニケーションブックはかさばりがちで、使えるカードが多くなるほど持ち歩きにくくなるかもしれません。

高等部の B さんは、多くの児童生徒が活用しているプラスチックファイルではなく、布製のコミュニケーションブックを使い、それを前掛けのようにして使っています（右図）。これによって、移動の際にもほとんど違和感なく持ち運ぶことができるようになっています。使用できる場面が広がることによって、より多くの生活場面で自分の意思を相手に伝えてコミュニケーションを図る機会が広がるという好循環が生まれます。A さんのこの取り組みを最初に目にしたときには、「**この手があったか！**」ととても驚きました。ぜひ、高等部の手芸班にも協力してもらい、活用できそうな児童生徒には取り入れてもらえるとよいと思います。

社会的有意性の点から考えると、PECS は特に子どもの動機づけの高い休み時間などを活用することから始めます。そして、獲得した発信のスキルを学習場面や報告するといった場面にも広げ、内容を深めて、主体的な発信の力を育てていきます。そのため、音声言語を持たない子どもにとって、PECS は豊かな社会参加を目指す上でも、社会的有意性の高い一つの重要な手段として活用できます。